



湧水・木曾路福島宿

山峡の街道、木曾路は中山道の中でも江戸時代を彷彿させるに十分な宿場が多く、昔日の面影を色濃く今に伝える。約九十キロメートルに及ぶ街道に十一宿を数えるが、今回お伝えする福島宿は、その中間点に位置する。江戸時代、東海道の箱根、新居、中山道の碓氷と福島の間所は四大間所と呼ばれていた。それだけに交通の要衝でもあり、「入り鉄砲と出女」を厳しく監視していたと伝えられる。また、木曾ヒノキの管理を尾張藩に託して、密輸が行われないよう目を光らせていた。

そんな福島間所だけに、名所・旧跡が多いのである。町並みを歩くと当時に思いをはせ、すがすがしい気分となる。写真の湧水は高台に位置する上ノ段にあり、千本格子の民家や高札場が目映り、江戸時代の風情が心地よい。

勢いよく桶から流れ落ちる湧水を「水場」と呼んでいた。江戸時代から昭和の初めごろまで、町内の簡易水道として住民に利用されていた。昔の上水道を知る貴重な遺産と言える。

(写真・文 樋口健二)